

# 武庫川臨床教育学会 ニュースレター

2020.10.03 No.5



## 第8期役員体制の決定

▼2020年8月25日に選挙管理委員会（中村又一委員長・高橋孝子委員・二羽礼委員）による開票作業が行われ、第8期の学会役員が決定しました。なお、今回の役員候補の選出は、会則第10条の規約に基づき、有権者(選挙人)105名、投票数49名（投票率は46.7%）、有効投票数445票でした。▼選挙により選出された10名の役員候補から、会長職は高点者が就任し、副会長・理事・監査についてはそれぞれの同意を得て第1回理事会で協議し、下記の第8期の体制を決定しました。

### 理事会・監査役員

会長	上田孝俊	武庫川女子大学
副会長	石井邦也	
理事（事務局長）	吉益敏文	豊岡短期大学
理事	吉岡眞知子	東大阪大学
理事	渡邊由之	東大阪大学
理事	福井雅英	滋賀県立大学
理事	中村又一	
理事	長谷範子	花園大学
監査	岩崎久志	流通科学大学
監査	小谷正登	関西学院大学
顧問	田中孝彦	

理事会3役 上田孝俊 石井邦也 渡邊由之 吉益敏文

事務局 事務局次長 木田重果（編集委員長）

高橋孝子（会計） 二羽礼（編集委員会事務）

▼第1回理事会・事務局合同会議にて理事の役割分担、事務局員の補充、編集委員会の構成メンバーの決定などをしました。新たなメンバーで奮闘したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

武庫川臨床教育学会

<http://mukogawarinkyo.com/>

〒663-8558

兵庫県西宮市池開町 6-46

武庫川女子大学教育研究所内

電話番号: 0798(45)9866

メール: [mukogawarinkyo@yahoo.co.jp](mailto:mukogawarinkyo@yahoo.co.jp)

## 秋からの学会活動について（予定含む）

コロナ禍の見通しが不透明な中、これからの学会活動が武庫川女子大学の活用も含めてきわめて流動的ですが以下のような内容を考えております。日程詳細が決定しだい、次回（冬号）のニューズレターもしくはホームページで紹介していきます。

### 1. 第15回武庫川臨床教育学会研究大会

開催日 2021年2月28日（日）

会場 武庫川女子大学（予定）

※ 特集の一つとして「小林剛先生から学ぶこと、引き継ぐこと（仮）」も予定しています。

### 2. 研究会「教員を目指す大学生が学ぶ生活綴方教育—教育を学ぶとは何か—」

開催日 2020年11月7日（土） 午後1時～

会場 東大阪大学（予定）

※ 次年度の日本臨床教育学会第10回研究大会が関西方面で予定されています。それに向かい、本学会でも学習を深めながら研究の輪を広げたいと思います。

### 3. 読書会・・・岩崎久志会員の『学び直しの現象学』をテキストに、10月から再開します。

開催日 毎月第一土曜日 午後5時～7時

会場 武庫川女子大学上田研究室

### 4. ニューズレター

年間4回の発行予定です。第5号から「私と臨床教育学」というテーマで連載を始めます。会員の皆様からの投稿も大歓迎です。日頃、感じ考えていることを「アラカルト」としてメールでお寄せください。下記参照。

理事会では「話題」を決めて多領域での状況を交流しています。ぜひ、会員の皆様も意見を寄せてください。

「アラカルト：●●（話題）」と題して、[mukogawarinkyoo@yahoo.co.jp](mailto:mukogawarinkyoo@yahoo.co.jp)まで意見・感想をお願いします。

## 編集後記

第5号は第8期の役員体制を紹介しました。くわえて「私と臨床教育学」というシリーズ連載（第1回は上田会長・石井副会長にお願いしました。みなさんからの投稿大歓迎です。ニューズレターを通して会員のみなさんとの小さな交流が深まればと思います。今後ともよろしく願いいたします。（文責:吉益）

新型コロナウイルスという非日常の出来事が、気づけば日常化しているように思います。新しいウイルスは、宿主である人間との一種の共生関係が築かれれば、「不要不急の安定状態」になると解剖学者の養老孟司が述べています。今は宿主を死に向かわせすぎている新型コロナウイルスも、人間との共生に向けて苦心しているのかもしれませんが。人間もまた苦心しています。しかしそれは「共生」とは別の道のようなのです。ウイルスの誕生は、進化の道筋で高等生物が生まれたあと、高等生物の一部が外に飛び出したものとして生まれたものだと思います。親から子への垂直方向の遺伝情報の伝達に比べ、はるかに効率的な水平方向の情報伝達を可能にするために。感染時、宿主タンパク質はウイルスタンパク質を受け入れるかのような働きをし、このことを、生物学者の福岡伸一は、「ウイルスを招き入れている」と表現しています。一人ひとりの命への脅威は軽視できませんが、ウイルス禍における「考え方」をこそ、鍛えていきたいものです。参考：朝日新聞社編『コロナ後の世界を語る』（文責：渡邊）

## シリーズ：私と臨床教育学 ①

### 臨床教育学研究と「とき」

上田 孝俊

私は教育学部出身ですが教育の勉強はほとんどせず、卒論研究に取り組む大学生活の後半は、山村地域の変化を知るために、統計を調べたり、聴きとり調査に出かけたり（というほどしていたわけではありませんが）しておりました。卒論も文学部地理学科に提出しました。1泊2日の日程で出かけては歩き回り、農家にお邪魔し、おじいさん・おばあさんに「昔と今」の様子を聴きとりました。卒論の結論は「トンネルができて通勤が便利になると農家の兼業化が進むと思っていたが、そうではなく勤労世代が脱農し都市域に移動する。」というものでした。人びとの生活を産業・労働という点だけで見るとはならず、文化の流入やその影響と関連して考える必要を感じました。老人たちが語る地域の共同活動の衰退などの変化に寂しさを感じ、それが若い世代の必要と齟齬をきたしていたのではないかと思いました。きっと私が歩き回ったあの地域は、今は誰も住んでおられないのではないかと思います。

最後の学生生活は、49歳からの大学院博士課程です。神戸大学の船寄先生との指導の縁を結んでいただいたのは福井雅英先生です。福井先生とは滋賀県内の中学校で12年間、同僚・先輩として勤務しました。その福井先生が船寄先生の下で博士論文を書き終えられ、たぶん「誰か次に大学院にくる教師はいないか」という話になり、私に声をかけていただいたと思います。初めて船寄先生にお会いしたのも福井先生の琵琶湖岸の勉強小屋（失礼）でした。「現役の教師は、授業料は払ってくれる、就職の世話をしなくない。」というところから私にもだったと思います。

研究テーマを何に絞るのかというのも大きな課題でした。「上田さん。理論的なもので博論を書くのは、あなたは難しい。せめてだれも使っていない初見の資料を探しだすとか……。滋賀県内しか無理だろうから、近くの学校に何かないかね」。幸い修士でお世話になった滋賀大学の木全清博先生が県内各校の資料収集に積極的に取り組まれており、その資料から戦後初期の社会科をコアとするカリキュラムづくりが実験学校でおこなわれていることを知りました。その一つが私が居住する隣の校区の学校であり、早速に訪問させていただき、当時の研究誌をはじめ学校日誌、教員の記録、はては倉庫の奥で「実験学校」の看板まで目にし、研究の中心資料とすることができました。当時の教師の一人が父の従兄弟であったというもあり、その繋がりからインタビューに快く応じていただけました。資料収集の直後に、資料閲覧を快諾いただいた校長先生、また父の従兄弟、さらにはインタビューを電話でお願いし、「しばらく入院するから、退院したら連絡する」とおっしゃっていた先生の訃報に接し、研究には「とき」が大きなポイントとなることを身にしみて感じました。

私自身の小さな研究の歩みをふり返り、研究もその具体的方法も、「とき」を意識することだと感じました。インタビューをした結果は「いま」そのときだけのものであり、極端に言えば明日にすれば変わることを自覚した検討が求められます。またその変化を追うのも重要な課題です。もう半年しか武庫川にはおりませんが、そのことを最後にまとめる仕事にできればと思っています。

## シリーズ：私と臨床教育学 ②

### 臨床教育学と私

石井 邦也

臨床教育学論集（第8号、2016）の研究ノートに、『エピソード記述』による保育士の質の向上と臨床教育学」として、臨床教育学を私がどう感じているのかを述べました。それから4年ほどが経ちましたが、その時に私が感じていた臨床教育学のイメージは、今も同じです。少し、ご紹介します。

イタリア、レージョ・エミリアの教育実践の理論的な柱は「関係性と聴くことの教育学（The pedagogy of relationship and listening）」であって、「聴く」ということと「聴く－聴かれるという関係性」が重要視されています。

「エピソード記述」では、自分の実践を振り返り、その臨床の場で実践者が何を感じ、何を体験したのか（関与観察）を記述します。それは『実践者の語り』だと私は思っています。そして、その実践を他者・協働者との応答を通し、共に学び合い、実践を深めようとするのがエピソード記述という方法です。実践を語る者と、その語り（報告）を聴く者が応答し合い、お互いに、実践を深め合っようとする関係性の中で、学びが深められることが意図されていると思っています。

実践の記述、そしてその振り返り。そして、他者・協働者との応答のなかで、「臨床の知」が深まってゆくものである、そのように考えています。

武庫川臨床教育で修士課程を終了したと同時に、「自主ゼミ」を14年ほど続けてきましたが、それも、同じような思いがあったからだと思えます。ジュディス・ハーマン『心的外傷と回復』など、いろいろなテキストを読み合い、そしてそれとともに、それぞれの実践の悩みなどを聴き合い、励ましあってきたのも、「聴くことと関係性」を大切なものとしてきた例ではなかったのかな、と思っています。

今、小学生、中学生の不登校生と関わりを持っています。

学校に行けないのは、どうしてなのか。「登校することがしんどい」、そんな現実があるのなら、無理して学校に行かなくてもいいのではないのか、とも思っています。特に、小学生は自分の思いを言葉として訴えることは、簡単にはいかないようで、一緒に遊んだり、調理や工作などの作業をしている時に、子どもたちの思いのかけらを聴けるように感じています。「遊戯療法」という関わりがありますが、「なるほどな！」と実感しています。

学ぶという権利、それをどう保障してゆくのか。学校との関係をどう深めてゆけばいいのか。家庭との関係・連携をどう取ってゆけばいいのか。複雑な事情が絡みあう現実の中で、子どもたちと接しながら、その臨床の場で、「教育とは何か」を問い続け、語り合い、答えを練り続けてゆくこと中に、臨床教育学の姿、その輪郭がはっきり見えてくるのではないのかな、そのように、今、思っています。